

特別寄稿

“自然を見つめる”

—川崎医科大学卒業生と共に23年間—

川崎医科大学 麻酔科学教室

伊 澤 寛

(平成10年3月31日受理)

“Vigilance”

(Received on March 31, 1998)

概 要

過去23年間に川崎医大附属川崎病院麻酔科では約30,000症例の全身麻酔を実施した。麻酔科医師が全国的に不足して、獲得が困難であったため、大半の全身麻酔管理は、川崎医科大学を卒業した研修医に依存することを余儀なくされた。私達が誇りとしているのは、全身麻酔に関連する事故—術中心停止などが皆無であったことである。麻酔事故は医療過誤が原因となることが多いが、患者を注意深く観察することによって未然に防止できるものと確信する。

Abstract

We performed about 30,000 cases of general anesthesia from 1975 to 1997. For the two decades, owing to a shortage of anesthesiologist at our facility, residents graduated from Kawasaki medical school were mainly used. We have not encountered severe anesthetic complications such as cardiac arrest during operation. Human error is still the most important avoidable cause of anesthetic mishaps. Perhaps even this factor might be preventable by close supervision, observation and vigilance.

『ピープ、ピープ、ピープ...』とパルスオキシメーターがけたたましく警報を発する。3歳の女兒に全身麻酔を開始して直後のことである。担当の研修医は胸部レントゲン撮影によって気管内チューブの挿入部位が深すぎたために片方の肺しか換気されていないことに気付き、事なきを得た。この間、彼は監視モニターの画面に表示される数字に全神経を集中させ、主役である患児を度外視しているのである。なぜ、患者の観察—口唇の色、均等な胸郭の動き、両肺の呼吸音—を疎かにするのであろうか。(パルスオキシメーター：非観血的に動脈血酸素飽和度を連続的にモニターする装置)

私の川崎医科大学附属川崎病院の麻酔科部長として23年間で夢のように過ぎ去ってしまった。川崎医科大学から麻酔科医が派遣されることを期待することはおろか、大学では麻酔科教室の定員を確保するのに汲々としていた。したがって、川崎病院では国家試験を合格したばかりの研修医に全身麻酔の管理を依存し、私自身もまた全身麻酔管理する傍ら彼等を監督するのが常

であった。若い医師達一主として川崎医科大学の卒業生一は晝夜を分かたずよく働き、私に追従してくれたことに感謝の念で一杯である。

誇りとしているのは、この23年間で約3万症例の全身麻酔を管理したが、一病例の麻酔に関係する重大な事故がなく、医療訴訟が皆無であったことである。勿論、ニヤミスを何度か経験したが、彼等は早期発見、これを迅速に対処することができた。私は彼等に麻酔の技術と理論、薬の使用法などについて多くを語らず、教えることができなかったことを後悔している。唯、『患者を直接監視する』ことを繰り返して訴えた。『監視 (Vigilance)』は米国麻酔学会の標語になっているものであり、私自身も座右の銘としている。2年間以上に亘って苦勞を共にした彼等との送別の際して、この九文字を刻印した喉頭鏡を記念品として贈呈した。

ハイテクの技術を駆使した測定機器と警報システムが装備されたコックピットの中に座して、呼吸・循環を鮮やかに制御するのは麻酔科医の醍醐味である。過去10年間の麻酔学の進歩を振り返っても、各種監視機器の導入、新しい麻酔薬の開発、麻酔技術の進歩によって麻酔が安全になったことは否めない。はたまた、ありあわせの古典的な診断器具を使って、研ぎ澄まされた感覚と生理・生化学的知識に基づいて患者の中に起きている謎を解くことにも麻酔のプロとしての尽きない喜びがある。

今更何が、コンピューターによって制御された現代の医学を否定して、ヒポクラテスの時代に押し戻そうとする反動哲学を固執する気は毛頭ない。しかし、現代の医学教育、いな、現代の価値基準がすべてコンピューターにより弾き出された数字によって判定され、問題の実態が等閑に付されることを懸念するのである。

齢を重ねるにつれ、世界的なアミノ酸研究の第一人者である恩師故古武彌四郎先生が私達卒業生に贈って下さった教訓が蘇ってくる今日此頃である。

『本も読まねばならぬ
考えてもみなくてはならぬ
しかし凡人は働かねばならぬ
働くとは天然に親しむことである
天然を見つめることである
かくして天然が見えるようになる』

『働く』ということは自ら探究することである。患者から敬虔な気持ちですべてのことを学ぶことによって、始めて創造の精神が培われ、病める人への愛と奉仕の精神が生まれると考える。